遠藤周作文学の研究
―宗教・ジェンダー・〈痕跡〉―

（要旨）

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号：Ｄ１６４５９３

氏　　名：余　盼盼（ヨ　ハンハン）

本論文は、現代作家遠藤周作（1923～1996）の文学を〈宗教〉、〈ジェンダー〉、〈痕跡〉という三つの鍵概念によって考察するものである。

従来の研究では、「宗教とジェンダー」という複眼的視点から日本文学を論じる試みはあまりなされてこなかった。遠藤研究においても、ジェンダー研究と宗教研究の間には依然として壁が存在している。本論文ではそのような状況を見直し、学際的なアプローチによって遠藤文学における宗教とジェンダーが出会う空間を探り、新たな知見や解釈の可能性を提示することを試みる。これが第一の目的である。

加えて、遠藤文学を読み解くもう一つのキーワードとして〈痕跡〉という概念を取り上げる。現状では、〈痕跡〉は主に個別の作品論において分析されているのみである。しかし本論文では、この〈痕跡〉を、遠藤文学を貫く主要モチーフとして捉え直し、〈痕跡〉の視点から遠藤作品を再解釈する。これを本論文の第二の目的とする。

上記のような目的のもと、本論文は以下の三部構成で論述を展開した。

第Ⅰ部　初期文学における宗教・ジェンダー・〈痕跡〉

第Ⅰ部では、遠藤文学の原初的な基盤を探り、初期作品における宗教とジェンダーの交差点を明らかにした。

第一章「〈井戸〉のモチーフの継承と展開―「フォンスの井戸」から『青い小さな葡萄』へ―」では、遠藤の処女短篇「フォンスの井戸」（1951）から最初の長篇『青い小さな葡萄』（1956）に至る作品の生成過程に注目し、両作品の間で引き継がれている〈井戸〉のモチーフに対する遠藤のこだわりを明らかにした。その上で、〈井戸〉に象徴される無意識に潜む〈悪〉や〈闇〉が、後者では拡大と深化をみせていることを論じた。

第二章「「神の痕跡」としての〈葡萄〉―『青い小さな葡萄』論―」は、『青い小さな葡萄』で新たに導入された〈葡萄〉のモチーフに光を当て、登場人物一人一人の個別性を越える〈葡萄〉の担う役割を分析した。その結果、最終的にそれが遠藤の初期評論に見られる概念である「神の痕跡」として解釈できることを示した。さらに、〈葡萄〉のモチーフの導入とその役割から、小説家遠藤の誕生と成長の過程を読み取った。

第三章「共苦する神と「母性」―『聖書のなかの女性たち』論―」では、エッセイ集『聖書のなかの女性たち』（1958～1959）におけるキリスト像を、「共感共苦性」と「母性」という二つの側面から考察した。また、このような神のイメージをめぐる遠藤の模索を、1960 年代後半にアメリカに登場したフェミニスト神学の思想と比較してみた。フェミニスト神学者たちは、家父長制による女性差別や抑圧への異議申し立てという視点から神の女性性を主張している。彼／女たちの出発点は、日本人の心にあうキリスト像を模索する遠藤のそれとは違う。しかし〈アウシュビッツ以降〉という同時代的な文脈において、既成の制度としてのキリスト教、ひいては西洋社会を支える「象徴的秩序」に対する批判・反省という点において、遠藤とフェミニスト神学者たちの思想は極めて近似的な方向へ向かっており、パラレルに位置づけることができるという解釈を示した。

第Ⅱ部　中期文学における宗教・ジェンダー・〈痕跡〉

第Ⅱ部では、遠藤の中期作品において主に男性の視点で語られている宗教・ジェンダー・〈痕跡〉を考察した。

第四章「〈痕跡〉と「手記」の意味―『わたしが・棄てた・女』論―」では、〈痕跡〉の意味と機能を明確にするために、『わたしが・棄てた・女』(1963）における男性主人公（「ぼく」・吉岡）の「手記」に見られる三箇所の〈痕跡〉について詳細に検討した。その上で、「ぼく」・吉岡が〈痕跡〉に気付いていく過程を辿り、〈痕跡〉の機能を〈超越性〉、〈倫理性〉、〈宗教性〉にまとめた。さらに「手記」を「書く」ことは、〈魂〉に刻まれたミツの〈痕跡〉を認めた「ぼく」が、〈痕跡〉の背後にある〈神〉の呼びかけに応えていくことであるという解釈を提示した。

第五章「〈弱者〉の語る宗教・国家・ジェンダー――『死海のほとり』論（１）―」では、『死海のほとり』(1973）の〈巡礼〉の章に語られる「私」の苦しみを宗教・国家・ジェンダーという複合的な観点から浮き彫りにした。戦時下の上智大学における国家公権力と宗教の衝突（ヘゲモニー闘争）という社会的背景のもと、「私」は国家と宗教のイデオロギー装置によって作られた男性性のコードによって縛られ、国家・宗教・ジェンダーによる多重的な抑圧を受けていたのである。

第六章「イエス像の変容と「ねずみ」の〈痕跡〉―『死海のほとり』論（２）―」では、旧友の戸田とともにイエスの足跡を巡る旅の中で、「私」に生じたイエス像の変容を考察した。聖書学者である戸田が述べる「史的イエス」のイメージと、「私」が実感していた「無力なイエス」像とが合致していることを示し、そこに見られる「私」と戸田の神観をフェミニスト神学の視点から捉え直してみた。結果として、「力あるイエス」／「無力なイエス」は、覇権的な男性支配に基づいた「力」という概念を元に構築されたイエス観の表裏であることを解明した。一方で、「本当のイエス」を探る過程において「私」は〈魂〉の次元へと沈潜していく。そのことに「ねずみ」の〈痕跡〉が重要な役割を果たしていることを論じた。

第七章「〈同伴者イエス〉の〈痕跡〉と「十三番目の弟子」―『死海のほとり』論（３）―」では、「私」が最終的に〈同伴者イエス〉という認識を獲得する過程を考察し、そのような認識に至るために「ねずみ」に刻まれたイエスの〈痕跡〉に気づくことが非常に重要な意味を持つことを明らかにした。加えて〈群像の一人〉の各章は、「私」の〈痕跡〉体験に基づき、「私」自身によって書かれた「十三番目の弟子」でもあることを示した。また、そこに付与されているイエスの〈脆弱性〉は、常に他者の呼びかけに応答し、「我と汝」という相互的な関係に開かれていることを意味することを述べた。最終的に本作は、男性ジェンダー化された「力」を「神性の本質」とするような「家父長的な神」の偶像性を暴き、神の〈力〉の再考を促す作品として評価できると論じた。一方で初期から引き継がれている「母なる神」という遠藤の主張は、「厳父」／「慈母」という家父長的なジェンダー役割が前提となっている。そこにこの時点における遠藤のジェンダー観の限界が窺えるという結論を得た。

第Ⅲ部　後期作品『深い河』における宗教・ジェンダー・〈痕跡〉

第Ⅲ部では後期作品『深い河』(1993）を取り上げ、遠藤の宗教観の到達点を明らかにした。

第八章「美津子の〈真似事〉とその挫折―『深い河』論（１）―」は、美津子の人物像を〈真似事〉というキーワードをもとに考察した。美津子が印度に赴くまでの各段階で行った〈真似事〉は、内容に違いはあるものの、その実質は共通していた。つまり、性規範に基づいたジェンダー・パフォーマンスだったのである。しかし、それらは全て挫折している。共通する挫折の原因として、男性中心的な相対的価値観に従う自分と、それに対抗する自分との葛藤が考えられる。以上のことを明らかにした上で、結局のところ、そうした相対的価値観を超える、絶対的なものへの憧憬と渇望が機能しているということを本論文では指摘した。

第九章「啓子の実像と隠された役割―『深い河』論（２）―」は、磯辺の妻・啓子の人物像に光を当て、その実像と隠された役割を論じた。まず、磯辺と美津子から見た啓子の「外面的なイメージ」を整理し、〈近代家族〉の成立をめぐる同時代的な背景と結びつけながら論じた。次に、啓子の語られていない内面を探り、〈人生〉の次元における夫との関係への渇望を看取した。さらに、美津子の内面の変化を追い、彼女にとって啓子と印度の女神チャームンダーが重なっていることを明らかにした。

第一〇章「美津子における〈母〉、〈チャームンダー〉と〈痕跡〉―『深い河』論（３）―」は、宗教・ジェンダー・〈痕跡〉という複合的な視点から美津子像を考察した。本作では、美津子が「母性」やジェンダーという制度を超えた〈母〉を追い求める物語と、大津がキリスト教という枠組を超えたキリストを追求する物語がパラレルに描かれている。本論文ではこうした作品構造を指摘し、最終的に大津・〈同伴者イエス〉とチャームンダーが重なることによって、この二つの物語が交差しているという解釈を示した。そして最後に、ジェンダーや個々の宗教を超えて融合する、文字通り普遍的（カトリック）な神のイメージの創出という作品理解から、遠藤晩年の宗教観の到達点を評価した。

終章では、初期・中期・後期の遠藤文学を通じて、ジェンダーと宗教という二つのコードがどのように交錯しているかをまとめた。さらにそこに絡み合って〈痕跡〉が重要なモチーフとして描かれているという結論を提示した。

本論文全体を通して、遠藤が最終的に、国家、民族、文化、ジェンダーの制限を超えて、すべての人と〈魂〉の領域で巡り会うキリストを描こうとしていることが確認された。遠藤作品には、宗教とジェンダーのパフォーマンスに失敗する「挫折者」「劣等者」が多く描かれている。彼／女らは〈痕跡〉を通して、〈魂〉の次元で他者と神の相互的な関係性を見出し、救われていく。このように、彼／女らをも包み込み、一人たりとも見棄てない神のインクルーシブな〈愛〉を一途に追求する遠藤の創作姿勢が明らかとなった。そして最終的に、〈母なる神〉、〈同伴者イエス〉、そして〈痕跡〉を通して働く聖霊という遠藤独自の「三位一体の神」体系を本論文では提示した。